

Osaka Mozart Ensemble

69. Konzert

COSÌ FAN TUTTE

<i>Fiordiligi</i>	<i>Noriko Yomo</i>
<i>Dorabella</i>	<i>Yumiko Nakahara</i>
<i>Guglielmo</i>	<i>Hiroaki Hagiwara</i>
<i>Ferrando</i>	<i>Masayuki Kurata</i>
<i>Despina</i>	<i>Kaori Nishimura</i>
<i>Don Alfonso</i>	<i>Tsugumi Hagihara</i>

<i>Klavier</i>	<i>Ayumi Kakegawa</i>
----------------	-----------------------

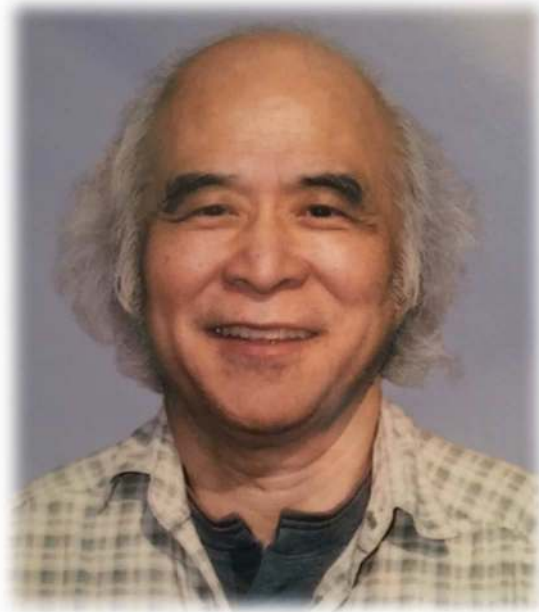
<i>Orchester</i>	<i>Osaka Mozart Ensemble</i>
<i>Konzertmeister</i>	<i>Masato Ohnishi</i>

<i>Dirigent</i>	<i>Hiroshi Takemoto</i>
-----------------	-------------------------

16.00 Uhr Sonntag, 23. Juni 2019
Ritto Center for Fine Arts „SAKIRA“

高橋 英郎 先生

1931 年 10 月 9 日 - 2014 年 3 月 18 日



東京府生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。明治学院大学文学部教授を経て、1983 年より「モーツァルト劇場」を主宰、日本語による意欲的な演出によって、オペラを市民の手に甦らせ、現代における創造の意義を探ることを目的にオペラ公演の制作・訳詞・総監督を務めた。1997 年、モーツァルトのオラトリオ『救われたベトゥーリア』を世界で初めて舞台化した。このオペラ公演の様態と準備の様子は、同年夏、フジテレビの「NONFIX」で紹介された。1975 年プーランク＝アポリネールの『テレジアスの乳房』の訳詞上演でジロー・オペラ賞を受賞。1990 年トマの『ハムレット』でクリエイション大賞を受賞。モーツァルト 5 大オペラをはじめ、ドビュッシー、プーランク、オッフェンバックなど、これまでの舞台公演に対して 2006 年度エクソンモービル音楽賞を受賞。「モーツァルト 366 日」（白水社）、「モーツァルト」（講談社）、「モーツァルト紀行」（朝日新聞社）、「モーツァルト 遊びの真実」（音楽之友社）、「モーツァルト・オペラ・歌舞伎」（音楽之友社）、「モーツァルトで一日が始まり一日が終わる」（講談社）、「モーツァルト頌」（共編、白水社）、「モーツァルト」（共訳、中央公論社）、「モーツァルト書簡全集」（全 6 巻）（共訳、白水社）、「魔笛 秘教オペラ」（共訳、白水社）、「モーツァルトとの散歩」（共訳、白水社）、「モーツァルトは語る」（共訳、春秋社）などの数多くの著書訳書がある。

メッセージ

モーツァルト劇場 高橋 照美

今回は大阪モーツァルトアンサンブルとの演奏会形式による「コシファントウツテ」とのこと、おめでとうございます。前回ドレメとのコラボによる華やかな衣裳での「コン」も楽しませてもらいましたが、今回は演奏会形式での公演とのこと、逆に純粋にモーツァルトの響きでアンサンブルを楽しめそうで嬉しいです。琵琶湖の栗東芸術文化会館さくらホールでの公演の実現、素晴らしいですね。天上に抜けるような皆さんの好演を祈っています。

ごあいさつ

モーツァルト劇場代表 蔵田 雅之

大阪モーツァルトアンサンブルとモーツァルト劇場の共催によるオペラコンチェルタンテ「コシファントウツテ」をあの世から高橋英郎先生は見えてくださることと思います。高橋先生がモーツァルト劇場を設立された理由は、「リアルタイムに言葉がわかるモーツァルトの作品を」でした。故に高橋先生のオリジナル訳詞を使用し、規模は中劇場サイズを軸にされていました。先生が最後の制作をされたのが「イドメネオ」(「クレタの王 イドメネウス」)でこれが先生にお会いする最後の作品になるとは思いませんでした。私自身、学務が最も煩雑な時期で上演の本番は記憶鮮明なのですが、稽古場となるとほんの一部しか覚えていません。しかし、その稽古場でご出版された本を進呈くださりながら雑談になり、ご専門は仏文(明治学院大学教授)でいらした先生がオペラ制作というなかなかの難事を何故継続なさったかを話してくださいました。「あれ、蔵田さんにお話しできなかったかなー、本にも随分書いたのです。」いつものように穏やかに語られていました。要約すると以下のようでした。

「結核で生死の境も経験しました。病室のラジオから流れるクラシックのうち、モーツァルトに救われました。重きが浮かび軽きが深く沈むような音楽。明日朝起きて生きていたらまたモーツァルトを聴こう。こんな毎日を繰り返すうち自ら外出して「魔笛」のチケットを買いにいけるまでになりました。その時わたしはすでに病いに勝っていたと思います。」

「ある日の夕暮れ、「レクイエム」を聴いていました。ワルター指揮の名盤です。「ラクリモサ」(「涙の日」)のモーツァルト絶筆部分、あの世に飛翔するような箇所に来ると目の前のザクロを描いた額縁が轟音とともにレコードプレーヤーの上に落下しました。現実のこととは思えずあらためて針を落とすと絶筆部分から先は掛からなくなっていました。こう言うのを天文学的偶然というのだろう、と思いました。」

モーツァルト劇場を引き継ぐことになり第1回のレクチャーコンサートはこの「レクイエムの奇跡」の朗読とその部分の演奏からスタートさせていただきました。その時、朗読と演奏をしたソプラノ歌手に次のお仕事のお願いをしようとすると、「すみません、お芝居の話しが来ていて「乙女妖怪 ザクロ」というのです。」

天文学的偶然は×2になったのでしょうか。

関西の素晴らしい声楽家の皆さんと大阪モーツァルトアンサンブルによる本公演が東京での公演への架け橋となればと強くおもいます。

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) KV 588

Così fan tutte ossia La scuola degli amanti

コジ・ファン・トゥツテ あるいは 恋人たちの学校

Ouverture 序曲: Andante – Presto

ATTO PRIMO 第1幕

Scena I 第1場 カフェ。フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ。

No. 1 *Terzetto* 三重唱: Allegro

「いや、ドラベツラはそんなことできないさ」(フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ)

Recitativo レチタティーヴォ

「さあ剣を！どちらでもお相手を」(フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ)

No. 2 *Terzetto* 三重唱: Allegro – Recitativo

「女の貞節などはアラビアの不死鳥さ」－「詩人のたわごと」(フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ)

No. 3 *Terzetto* 三重唱: Allegro

「すてきなセレナータ 彼女に捧げたい！」(フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ)

Scena II 第2場 海辺に面した庭園。フィオルディリージとドラベツラ、それぞれ脇に下げたロケットを眺めながら。

No. 4 *Duetto* 二重唱: Andante

「見てよ、ねえちよつと」(フィオルディリージ、ドラベツラ)

Recitativo レチタティーヴォ

「今朝はいつになく、なんだかはしゃいでみたいの」(フィオルディリージ)

Scena III 第3場 フィオルディリージ、ドラベツラ、ドン・アルフォンソ。

Recitativo レチタティーヴォ

「まあ！お願いドン・アルフォンソ、脅かさないで」(フィオルディリージ、ドラベツラ、ドン・アルフォンソ)

Scena IV 第4場 フィオルディリージ、ドラベツラ、ドン・アルフォンソ、旅支度をしたフェランドとグリエルモ。

No. 6 *Quintetto* 五重唱: Andante

「思うように動かない、足が進まない」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ)

Recitativo レチタティーヴォ

「なかなか面白い芝居だぞ」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、ドン・アルフォンソ)

Scena V 第5場 遠くで行進曲。やがて小船が幕に。

No. 8 *Coro* 合唱: Maestoso

Scena VIII 第8場 いくつかの椅子と一つの小机のある部屋。デスピーナ、ココアをかきまぜている。

Recitativo レチタティーヴォ

「嫌な仕事だわ、小間使いなんてものは」(デスピーナ)

Scena IX 第9場 フィオルディリージとドラベツラ、絶望して登場。

Recitativo レチタティーヴォ

「お嬢様がた、何です！」(デスピーナ)

Recitativo レチタティーヴォ: *Allegro assai – Maestoso*

「あーおさがり！この悲しみが目に入らないの！」(ドラベツラ)

No. 11 *Aria* アリア: *Allegro agitato*

「耐えられないこの苦しみ」(ドラベツラ)

Recitativo レチタティーヴォ

「ドラベツラ様、フィオルディリージ様、いったい何事ですか？」(デスピーナ、ドラベツラ、フィオルディリージ)

No. 12 *Aria* アリア: *Allegretto – Allegretto*

「男に、兵士に、誠実さを望むというのですか？」(デスピーナ)

Scena X 第10場 ドン・アルフォンソ、続いてデスピーナ。

Recitativo レチタティーヴォ

「デスピネッタ！聞いてくれ、お嬢様たちが恋人をなくして嘆いているが」(ドン・アルフォンソ、デスピーナ)

Scena XI 第11場 デスピーナ、ドン・アルフォンソ、フェランド、グリエルモ、続いてフィオルディリージ、ドラベツラ。

No. 13 *Sestetto* 六重唱: *Allegro – Allegro – Molto Allegro*

「うわしのデスピネッタ」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

Recitativo レチタティーヴォ

「うちで何をなさるの？」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ)

No. 14 *Aria* アリア: *Andante Maestoso – Allegro – Più Allegro*

「嵐にも、強い風にも」(フィオルディリージ)

Scena XIV 第14場 小ぎれいな庭。両脇に芝生用の二つのベンチ。フィオルディリージとドラベツラ。

No. 18 *Finale* フィナーレ: *Andante*

「ああ、すべて瞬く間に運命は変わり果て」(フィオルディリージ、ドラベツラ)

Scena XV 第15場 フィオルディリージとドラベツラ、フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ、続いてデスピーナ。

No. 18 *Finale* フィナーレ: *Allegro*

「そうだ、死んでしまおう」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

Scena XVI 第16場 フィオルディリージとドラベツラ、フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ、医者に変装したデスピーナ。

No. 18 *Finale* フィナーレ: *Allegro – Andante – Allegro – Andante – Allegro – Presto*

「お医者様が来ましたよ」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

…… 休憩 *Pause* ……

ATTO SECONDO 第2幕

Scena I 第1場 部屋の中。フィオルディリージ、ドラベツラ、デスピーナ。

Recitativo レチタティーヴォ

「なんてまあ、おかしなお嬢様がた！」(フィオルディリージ、デスピーナ)

No. 19 *Aria* アリア: Andante - Allegretto

「女も 15 になりゃ、大人になるものです」(デスピーナ)

Scena II 第 2 場 フィオルディリージ、ドラベツラ。

Recitativo レチタティーヴォ

「ちよっぴり楽しむだけ、寂しさで死んでしまわないように。」(フィオルディリージ、ドラベツラ)

No. 20 *Duetto* 2 重唱: Andante

「私は選ぶわ、栗毛色のほうを」(フィオルディリージ、ドラベツラ)

Scena V 第 5 場 グリエルモはドラベツラと腕を組む。フェランドとフィオルディリージは腕を組まない。

二組の男女は互いに黙って見つめ合い、溜息をついて微笑む。

Recitativo レチタティーヴォ

「とても良いお天気ね」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ)

No. 23 *Duetto* 二重唱: Andante grazioso

「受けてくださいこのハートを」(ドラベツラ , グリエルモ)

Scena VI 第 6 場 フェランドとフィオルディリージ。

Recitativo レチタティーヴォ: Allegro - Adagio

「ひどい人！逃げるのですか？」(フィオルディリージ、フェランド)

Scena XII 第 12 場 フィオルディリージ、ついでフェランド。部屋の中にグリエルモとドン・アルフォンソ。

Recitativo レチタティーヴォ

「さあこの帽子を」(フィオルディリージ)

No. 29 *Duetto* 二重唱: Adagio - Allegro - Larghetto - Andante

「もうすぐあの人の胸に抱かれるわ」(フィオルディリージ、フェランド)

Scena XV 第 15 場 豪華な照明の大広間、奥にはオーケストラ、銀の燭台のついた四人用テーブル一つ。

正装した召使い四人。デスピーナ、ついでドン・アルフォンソ。

No. 31 *Finale* フィナーレ: Allegro assai

「さあ、急ぎましょう、灯りをともして、品よく豪華に食卓の準備を！」(デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

Scena XVI 第 16 場 フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ。

新郎新婦が進み出てくる間、合唱が歌い、オーケストラが行進曲を演奏する。

No. 31 *Finale* フィナーレ: Andante - Larghetto

「今こそ我が命、情熱に輝くよ」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ)

Scena XVII 第 17 場 フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、ドン・アルフォンソ。

公証人に変装したデスピーナ登場。

No. 31 *Finale* フィナーレ: Allegro - Maestoso - Allegro

「お待ちせしました」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

Scena ultima 最終場 フィオルディリージ、ドラベツラ。フェランドとグリエルモはマントと軍隊の帽子で。

No. 31 *Finale* フィナーレ: Andante - Allegro - Andante - Allegretto - Andante - Allegretto
- Andante con moto - Allegro molto

「無事に愛する人の腕の中に」(フィオルディリージ、ドラベツラ、フェランド、グリエルモ、デスピーナ、ドン・アルフォンソ)

《Einführung》



四方 典子 Noriko Yomo フィオルディリージ

同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了。オペラでは、「魔笛」夜の女王、「椿姫」ヴィオレッタ、「ラ・ボエーム」ムゼッタ、「コジ・ファン・トゥッテ」フィオルディリージ、「天国と地獄」エウリディーチェ、「つばめ」リゼット役等で出演。また、関西の主要なオーケストラの演奏会にて第九や宗教曲等のソリストとして多数出演。関西二期会、堺シティオペラ各会員。



中原 由美子 Yumiko Nakahara ドラベツラ

同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了。第12回高槻音楽コンクール奨励賞。ヘンデル『メサイア』、モーツァルト『戴冠式ミサ』『レクイエム』、ベートーヴェン『第九』等にソリストで出演。オペラでは『蝶々夫人』スズキ、『魔笛』ゲーメⅢ、『フィガロの結婚』マルチェッリーナ、『リゴレット』マッダレーナ、『椿姫』アンニーナ役等で出演。関西二期会準会員。茨木市音楽芸術協会会員。女声合唱「コーラス虹」指導者。



蔵田 雅之 Masayuki Kurata フェランド

東京藝術大学及び大学院修了。文化庁在外研修員としてミラノにて研鑽を積む。1985-90年、レハール「微笑みの国」のタイトルロールを歌唱し、欧州デビュー、ミュンヘン、ウィーン、ブダペストなどで活躍。国内では新国立劇場公演など、オペラのテノール主要キャラクター60作品に出演した。モーツァルト劇場代表、フェリス女学院大教授、二期会会員。



萩原 寛明 Hiroaki Hagiwara グリエルモ

京都市立芸術大学卒業、同大学院修士課程修了。ウィーン国立音楽大学卒業。これまでにオペラでは「ドン・ジョヴァンニ」の表題役をはじめ、「フィガロの結婚」アルマヴィーヴァ伯爵、「魔弾の射手」オットカール侯爵、「蝶々夫人」シャープレス、「カルメン」エスカミーリヨ、「外套」ミケレ等で出演。また第九や宗教曲等のソリストとして演奏会に多数出演。関西二期会、日本シューベルト協会、西宮音楽協会各会員。神戸女学院大学、兵庫県立西宮高校音楽科各講師。



西村 薫 Kaori Nishimura デスピーナ

大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。大学院在学中に「ヘンゼルとグレーテル」ヘンゼル役でのオペラデビューを皮切りに「コジファントゥッテ」「ドン・カルロ」「カルメン」「魔笛」「こうもり」など多数の作品に主要な役で出演。また、ベートーヴェン「第九」、マーラー「交響曲第3番」「大地の歌」、モーツァルト「レクイエム」などのソリストとして出演。艶やかな幅広い音域と独自のドラマティックな表現力を持ち味とし、今後の活躍が大いに期待されている。関西二期会会員。



萩原 次己 Tsugumi Hagihara ドン・アルフォンソ

京都市立芸術大学音楽学部及び同大学院を大学院賞を得て修了。95年友愛ドイツ・リートコンクール第1位、98年日本音楽コンクール第3位入賞。平成15年度大阪文化祭奨励賞受賞その他。モーツァルトの4大オペラをはじめ、バロック期から近代オペラまで数多くのオペラに出演。近年は、地元滋賀県にてオペラ演出と指揮を手掛け、2018年の公演に対し滋賀県芸術奨励賞を受賞する。現在、同志社女子大学、京都市立芸術大学各講師。



掛川 歩美 Ayumi Kakegawa 通奏低音 (ピアノ)

お茶の水女子大学音楽科卒業、同大学院博士前期課程修了。第7回“長江杯”国際音楽コンクール入選。第11回泉の森フレッシュコンサート並びに泉の森フレッシュガラコンサート出演。大学主催の推薦新人演奏会出演。これまでに、芝令子、小坂圭太、服部容子の各氏に師事。関西二期会、河内長野ラプリーホール、びわ湖ホール、堺シティオペラ、ミラマーレ・オペラ、みつなかオペラ等にてピアニスト並びにコレペイトウアを務める。

大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を行っている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリンツ氏、アダルベルト・スコッチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスベトラ・プロティッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルテウム大ホール、ヴィーン・ミノーレン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。



Intendant:	武本 浩				
Konzertmeister:	大西 正人				
Violinen:	濱田 利正	久保 聡一	佐藤 奈津子	清水 雅代	田邊 明子
	筒泉 直樹	藤井 聡子	横小路 美貴子	赤松 由夏	塩沢 まり子
Bratschen:	能勢 徹	河合 士郎	高橋 淑子	満多野 穂高	
Violoncelli:	加納 隆	中西 真理代			
Kontrabäße:	松本 大樹	塩田 英治			
Flöten:	門司 真美	沼田 真奈			
Oboen:	小林 靖之	利谷 久美			
Klarinetten:	柳楽 由美子	中田 今日子			
Fagotte:	尾家 祥介	服部 真貴子			
Hörner:	中根 慎介	北脇 知己			
Trompeten:	山崎 雅夫	中嶋 香織			
Pauken:	木村 祐				
Trommel:	松下 純子				



《Handlung》

舞台は 18 世紀末、南イタリアの海辺の小国ナポリ。登場人物はフェッラーラ出身の貴族の姉妹、フィオルディリージとドラベツァ、その恋人の青年士官グリエルモとフェランド、4 人の友人である年上の哲学者ドン・アルフォンソ、姉妹の小間使いのデスピーナである。カップルの組合せは、フィオルディリージとグリエルモ、ドラベツァとフェランド。

第 1 幕

[No. 1 三重唱 いや、ドラベツァはそんなことできないさ] 物語は、カフェの店先で、ドン・アルフォンソが 2 人の青年（グリエルモとフェランド）と言い争いをしている場面で幕を開ける。2 人は、友人である年上の哲学者ドン・アルフォンソから「彼らの恋人も他の女と同じで、その貞操などあてにならない」と言われるが、自分の恋人は絶対に裏切らないと主張し、ゆずらない。恋人の心を疑うようなドン・アルフォンソの物言いに激昂し、剣を抜き「戦うか、僕らの恋人たちを疑う理由を聞かせろ」とせまるフェランド。

[No. 2 三重唱 女の貞節などアラビアの不死鳥さ] ドン・アルフォンソは、「女の貞節など、アラビアの不死鳥のように、誰もが口にするが、誰も見たことがない」と歌い、若者たちは、その不死鳥こそ自分の恋人であると、負けずに返す。そこで、それぞれの言い分を証明するために 3 人は賭けをすることになった。ドン・アルフォンソの提案で、3 人は次のような芝居を打つことになった。2 人の若者が王命で戦場に行くことになったと恋人に告げ、出兵するふりをする。その後、変装したグリエルモとフェランドが姉妹を誘惑する。明朝までに姉妹が陥落したら、ドン・アルフォンソの勝ち。裏切らなかつたら、若い 2 人の勝ち。賞金は 100 ゼッキーニと決まった。（ゼッキーニはヴェネツィアで使用されていた金貨でナポリではドゥカティ金貨が使われていた。ゼッキーニはゼッキーノの複数形。1 ゼッキーノ金貨は 3.5g の純金なので、100 ゼッキーニの現在価値は、175 万円になる。）

[No. 3 三重唱 すてきなセレナータ、彼女に捧げたい] 若い 2 人は、すでに賭けに勝ったような気持ちで、愛の女神を讃えて、宴を開こう！と、歌い上げる。

[No. 4 二重唱 見てよ、ねえちょっと] 一方、こちらは彼らの恋人の姉妹。2 人は部屋で恋人の写真の入ったロケットを見せ合いながら、のろけあっている。2 人は恋人が現れるのを今か今かと待っている様子。

そこに、ドン・アルフォンソがやってきて、先ほどの賭けのための芝居を始める。ドン・アルフォンソは、フィオルディリージとドラベツァに、彼女たちの恋人が国王の命令で、急に戦争に行かなければならなくなると憂い顔で伝える。

[No. 6 5 重唱 思うように動かない、足が進まない] 続いて、旅支度を整えた 2 人の若者が現れ、その恋人である姉妹、ドン・アルフォンソの 5 人がその過酷な運命を嘆いていると、

[No. 8] 行進曲に導かれて兵士たちが登場し、いよいよ出発となる。

手紙を出して、浮気はしないと願う姉妹、これを慰める 2 人の士官、そして、こっそり腹を抱えるドン・アルフォンソ。（実際には、旅立ってはいない）

場面変わって、小間使いのデスピーナが、小間使いの仕事なんてつまらない！とグチっているところに、恋人が去って大荒れのフィオルディリージとドラベツァがやってくる。

[No. 11 ドラベツァの aria 耐えられないこの苦しみ] 絶望的になって、死なせて！と歌う、ドラベツァの aria。

[No. 12 デスピーナの aria 男に、兵士に、誠実さを望むというのですか] 悲しみに暮れる姉妹に、小間使いのデスピーナが「男に誠実さを望むなんて？」と笑い飛ばし、「気晴らしに、浮気でもなさったら？」と、たきつける aria。

一方、ドン・アルフォンソは、デスピーナに若者 2 人の変装を見破られる危険があるので、金を渡して味方につけることに。「悲しみに暮れる姉妹を慰めるために、2 人の異国人を姉妹に紹介して気晴らしをさせよう。」と言って協力を求め、変装をしたグリエルモとフェランドを紹介する。

[No. 13 六重唱 うるわしのデスピネッタに] デスピーナは紹介された「ドン・アルフォンソの異国人の友人」が変装した 2 人の青年士官であることに気が付かない。デスピーナに変装を見破られなかったことに自信をつけた若者 2 人は、いよいよ姉妹を口説きにかかるが、まったく相手にされない。

[No. 14 フィオルディリージの Aria 嵐にも、強い風にも] 嵐にも、強い風にも、びくともたじろがぬ、巖のように 愛はゆらぐことなく心はかたい！と歌う Aria。

若者 2 人は、「恋人が浮気をしなかったこと」に喜ぶが、ドン・アルフォンソは、明朝まで賭けは続くと言い、自分の言うとおりに芝居を続けるようにと命じる。

[No. 18 フィナーレ] 庭で恋人を想う二重唱を歌う姉妹。そこへ変装したフェランドとグリエルモが現れ、姉妹が自分たちになびかないのならと、絶望のあまり毒を飲み、倒れたふりをする。姉妹は驚き、変装した 2 人に対し同情が芽生える。そこに、医者に変装したデスピーナが登場。「磁気療法」を 2 人にほどこす。デスピーナは、苦しむ 2 人を支えるように姉妹に命ずる。意識を取り戻した 2 人は姉妹を再び口説きだし、姉妹は激怒。混乱のうちに幕を閉じる。

第 2 幕

[No. 19 デスピーナの Aria 女も 15 になりや、大人になるものです] なかなか浮気をしない姉妹に、デスピーナが「女も 15 歳になったら、恋人を夢中にする方法を知ってないよ。」「嘘をつく方法も知らないよね。」と歌う。それを聞いて、彼女の軽薄な態度に驚きながらも、姉妹の心も少しずつ変化していく。

[No. 20 二重唱 私は選ぶわ、栗毛色のほうを] 姉妹は互いに「どちらを選ぶ？」と尋ね、ドラベツラは「栗毛色の方」（グリエルモ）、フィオルディリージは「金髪の方」（フェランド）と実際とは逆の恋人を選んでしまう。

さて、そこに変装した 2 人の若者がアルフォンソとともに現れ、さきほどの失態を謝罪。姉妹に許しを請う。そして、ドラベツラはグリエルモと、フィオルディリージはフェランドと、それぞれ散歩にでかける。すでに先ほどのデスピーナの言葉によって、かなり気持ちが動いている姉妹は、そこでさらに若者からの愛のささやきに気持ちが傾いていく。

[No. 23 二重唱 受けてくださいこのハートを] まず、ドラベツラがグリエルモに心をゆるしてしまふ。「ああ、なんて幸せ！身も心も生まれ変わった喜びよ！」と 2 人で歌い上げる。

しかし、フィオルディリージはゆらぎながらも拒絶。

グリエルモは、フェランドとドン・アルフォンソにドラベツラが心変わりしたことを伝える。それを聞き、フェランドは怒り狂うが、ドン・アルフォンソとグリエルモになだめられる。

部屋ではフィオルディリージが、心変わりしたドラベツラを責めるが、逆に「戦場に発った 2 人にこだわる必要はない。」と言われ、実は自分も金髪の彼に惹かれているのと、認めてしまふ。

[No. 29 二重唱 もうすぐあの人の胸に抱かれるわ] フィオルディリージは 1 人になると、揺らいでしまった自分の心が許せなくなり、恋人の軍服を着て戦場に向かおうとする。しかし、そこに現れたフェランドから「（あなたの愛が得られないのなら）どうぞ、あなたの剣で僕の胸を刺して、死なせてください！」と激しく求愛され、とうとう陥落。

賭けに勝ったドン・アルフォンソは、落ち込んで彼女たちを懲らしめたいと言う若者に、互いにそれぞれの恋人と結婚するよう提案し、「女はみなこうしたもの（コジ・ファン・トゥッテ）」と歌う。

[No. 31 フィナーレ] 結婚式の祝宴の準備が進められる。フィオルディリージとフェランド、ドラベツラとグリエルモのカップルが登場。そこに、公証人に扮したデスピーナが現れ、二組のカップルは結婚の証書にサインする。そのとき遠くから兵士たちの歌声が聞こえてくる。婚約者たちが戦場から戻ってきたと知らされ、姉妹は呆然とし、あわてて 2 人の異国人を別室にかくまう。変装を解いたフェランドとグリエルモが軍服姿で現れると、2 人の青年は結婚証書を見つけて激怒。姉妹は平謝りする。そこですべてが種明かしされ、今度は姉妹がだましたことを怒るが、ドン・アルフォンソから「賢くなるように、恋人たちの目を覚まさせたのさ」と言われ、一同和解して「幸せな者よ、ものごとすべて善意にとる者、あらゆる試練にも冷静な態度で、泣きたいようなことも人には笑いの種、人生の嵐に光射し込む」という教訓的なメッセージを歌い納めて幕を閉じる。

藤井 聡子

コジ・ファン・トゥッテ あるいは 恋人たちの学校

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

この上なく尊敬すべき友にして

盟友よ！

この手紙の内容にどうぞ驚かないでください。——あなただけにです。——最上の友よ、あなたは私と私の生活をよくよく御存知なので、あなたをまったく信頼しきって打ち明けようと勇気をもつにいたりしました。——私のオペラの〔ギャランティ〕200ドゥカーテンは、（現在の慣行では）来月、支配人から受け取ることになっています。——そのときまで、もしあなたが400フロリンを都合つけて、貸して下さろうというお気持ちがおありでしたら、あなたの友人を最大の窮地から救い出すことになるでしょうし、私は定められた期日に、現金で、あらゆる感謝の念をこめて、ちゃんとそのお金をお返しすることを名誉にかけて約束します。・・・（中略）・・・木曜日の朝10時には、拙宅でオペラのちょっとした試演がありますので、あなたを（でも、あなたおひとりだけを）お招きいたします。——あなたと、ハイドンだけを招待します。——サリエリの陰謀については、じかに会ってお話ししましょう。でも、これはもうすべて水泡に帰したのですが。

1789年の年末、モーツァルトはフリーメイソンの同志で裕福な商人、ミヒャエル・プフェルクに借金を依頼する手紙を送った。新年には薬屋と医者で代金を支払う必要があると述べている。モーツァルトは1788年6月ごろからたびたびこうした手紙をプフェルクに送っている。当時、妻コンスタンツェは、足の感染症に悩まされており、蛭に血を吸わせる瀉血療法を受けていた。主治医クロセット博士の勧めにより、療養と治療のために1789年8月から硫黄泉があるヴィーン南方のバーデンに長期間滞在していた。湯治のための費用が借金の主な理由であったと考えられるが、当時、彼は皇王室宮廷音楽家として年俸800グルデン（＝800フロリン）のほか、レッスン代、演奏会収益、作曲料収入があった。1790年の彼の年収は、1856フロリンと推定され、ヴィーン総合病院の外科医長（1200フロリン）をはるかに凌ぐ高額所得者であった。その彼が巨額の借金をした理由は謎に包まれているが、この手紙にあるオペラが本日演奏する『コジ・ファン・トゥッテ』KV 588である。初演の報酬として200ドゥカーテン（＝900フロリン）が支払われるとあるが、実際にモーツァルトが手にしたのは450フロリンであった。プフェルクは、この手紙の欄外に「300フロリン送金」と書いている。現在、1gの金は約5,000円なので、3.5gのドゥカーテン金貨は約17,500円に相当する。従って、1フロリン銀貨は3,900円。当時の貨幣価値を金価格だけで換算するのはかなり乱暴であるが、プフェルクが送金した300フロリンは117万円にもなる。1785年当時、年間500フロリン（194万円）あれば、中産階級の男性一人がヴィーンで快適に暮らすことができた（1ドゥカーテン金貨＝4.5フロリン銀貨、1フロリン銀貨＝60クロイツァー銅貨）。

『自作全作品目録』に、「12月、アリア、オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』用。ベヌッチのために。私に目を向けなさい、云々。」が記入される。『自作全作品目録』で「私に」となっているアリア「彼に目を向けなさい」KV 584は、グリエルモ役のフランチェスコ・ベヌッチのために書いたものであったが、モーツァルトは、フェランドとのバランスを取ろうとしたのか、第1幕第15曲のアリア「かたくなにならないでください」に変えたため、オペラの初演時には歌われなかった。12月31日木曜日、モーツァルト邸でプフェルクとハイドンの前で試演が行われた。年が明けて1790年1月20日、再びプフェルクに宛てて手紙が書かれる。

あなたの友情と善意にまったく感動しております。もし、また100フロリンを私に信頼して託して下さることができ、そのお気持ちがおありでしたら、どんなにかありがたいことでしょう——

あす、劇場で初めてのオーケストラによる稽古があります。——ハイドンも一緒に出かけます。——お仕事のご都合がつき、もしや稽古にも立ち会いたいとお思いでしたら、明朝10時にどうぞ拙宅にいらしてください。みんなでそろって参りましょう。

最初のリハーサルから5日後の1月26日の火曜日、オペラは皇王室国民宮廷劇場（ブルク劇場）で初演された。ブルク劇場に掲示されたポスターには、「歌詩は、皇王室宮廷劇場付イタリア語喜歌劇詩人ダ・ポンテ師。音楽は皇帝陛下に仕える現職楽長ヴォルフガング・モーツァルト氏。——台本はイタリア語のみで、栈敷係長のところで24クロイツァー（1560円）で入手でき

る。」とある。

『自作全作品目録』にオペラが完成したことが記入される。そこには初演時の出演者のリストがある。

1790年1月

コシ・ファン・トゥッテ、またの名、恋人たちの学校。二幕のオペラ・ブッファ。楽曲集。——役者。フェッラレージ・デル・ベーネ、ヴィルヌーヴ、ブッサーニ各夫人、カルヴェージ、ベヌッチ、ブッサーニ各氏

フィオルディレージを演じたのは、フェッラレージ・デル・ベーネとある。彼女はフェッララ出身でフランチェスカ・ガブリエーリ、通称アドリアーナ・フェッラレージ・デル・ベーネである。フェッラレージはフェッララ生まれでこの綽名がある。ヴェネツィアでサッキーニに師事したのち、1788年12月13日、ヴィチエンテ・マルティニ＝ソレルの『ダイアナの木』のダイアナ役でヴィーンデビュー、ロレンツォ・ダ・ポンテと大変親密な関係になり、彼の台本によるオペラにたびたび出演した。1789年8月29日、ヴィーンで行われた『フィガロの結婚』の再演時にスザンナを演じた。この公演の際、モーツァルトは、ロンドー「あなたを愛している人の望みどおりに」KV 577と「私の胸は喜びで踊るの」KV 579を彼女のために作曲し、『フィガロの結婚』に入れ替え、あるいは挿入している。しかし、彼は彼女のことをそれほど高く評価していなかったようである。1789年4月16日に、モーツァルトが旅先のドレーズデンから「ホーアー・マルクト街、ヴァルゼック館、フォン・プフェルク氏気付コンスタンツェ・ド・モーツァルト、旧姓ド・ヴェーバー夫人様」に宛てた手紙には、ドメニコ・チマローザの『当てはずれの悪だくみ、またの名、露見した瞞着』を観て「プリマドンナのアッレグランディ（イグナーツ・ホルツバウアーの弟子、マグダレーナ・アッレグランディ）は、フェッラレーゼ嬢よりはずっとまじだ。——とはいっても、大したもんじゃないけど。」と語っている。さらに、1789年8月19日にモーツァルトからバーデンで療養中のコンスタンツェに宛てて書かれた手紙にも次のように記されている。

フェッラレーゼのために書いた小アリア（KV 579）は、彼女が素直に歌ってさえくれたら、喜ばれると思うけど、それがあやしいんだよなあ。とにかく、曲はとて彼女の気に入った。ぼくは彼女の家で食事をした。——『フィガロ』は、日曜日にきっと上演されると思う。でも、前もってきみに知らせるよ。——一緒に聴けたら、どんなにうれしいだろう。——

ドラベツラを演じたルイーザ・ヴィルヌーヴは、フェッラレージの妹である。従って、ダ・ポンテは、フェッララ出身の姉妹をそのままフィオルディレージとドラベツラに配したのであった。ルイーザ・ヴィルヌーヴは、姉と同じく『ダイアナの木』のアモーレ役（1789年6月27日、ブルク劇場）でヴィーンデビューした。モーツァルトは、彼女のために1789年8月、ドメニコ・チマローザのオペラ『ロッカ・アズツラの二人の男爵』への挿入アリア「大いなる魂と高貴な心は」KV 578を、1789年10月にはピセンテ・マルティニ＝ソレルのオペラ『お人好しの気むずかし屋』への挿入アリア「誰が知っているでしょう、私のいとしい人の苦しみがなんなのか」KV 582と「私は行ってしまうわ、でもどこへ？」KV 583を書いている。

デスピーナを演じたドロテア・ブッサーニ（旧姓サルディ）は、ドン・アルフォンソを演じたフランチェスコ・ブッサーニの妻で、1786年5月1日に初演された『フィガロの結婚』のケルビーノ役であった。フェランドを演じたヴァンチエンツォ・カルヴェージは、すでに1785年にはブルク劇場の代表的なテノール歌手として活躍していた。ジョヴァンニ・ベルターティ台本、フランチェスコ・ビアンキ作曲のオペラ『誘拐された村娘』が、1785年11月25日にヴィーンのブルク劇場で再演された際、モーツァルトはカルヴェージとフランチェスコ・ブッサーニらのために、四重唱曲「せめておっしやって」KV 479、三重唱曲「やさしいマンディーナ」KV 480を書いている。ドン・アルフォンソを演じたフランチェスコ・ブッサーニは、1786年4月29日の『フィガロの結婚』初演時にバルトロとアントーニオ役で、1788年5月7日の『ドン・ジョヴァンニ』ヴィーン初演では、騎士長とマゼットを歌った。

モーツァルトは、グリエルモを演じたフランチェスコ・ベヌッチを高く評価していた。1783年5月7日にザルツブルクに住む父レーオポルトに宛てた手紙に、次のように記している。

今当地では、イタリア語のオペラ・ブッファがまた始まっていて、たいへんな人気を呼んでいます。——ブッフォ歌手が特に際立っています。ベヌッチという人です。

ベヌッチには前述したように、アリア「彼に目を向けなさい」KV 584を書いた。『フィガロの結婚』初演時にフィガロ役を演じ、『ド

ン・ジョヴァンニ』ヴィーン初演ではレポレッロを歌った。『フィガロの結婚』の初演時にバジリオとクルチオを歌ったテノール歌手マイケル・オケリーは、1826年に書いた『回想録』の中で次のように述べている。

『フィガロの結婚』の初めてのリハーサルのときの、興奮を抑えながらも、天才の燃えるような光に輝いた彼の表情を、私は生涯忘れることはできません。それを描写するのは、太陽の光を描き出したいと望むほど不可能なことです。モーツァルトは深紅の上衣に金モールをついた山高帽をかぶって舞台に立ち、オーケストラにテンポを与えていました。フィガロ役のベヌッチが、あらん限りの声量と、無類の情熱をこめて「もう飛べないぞ、恋の蝶々」を歌いました。

私はモーツァルトのすぐ傍らにいましたが、彼は「ブラヴォー！ ブラヴォー！ ベヌッチ！」と小声で繰り返していました。やがてフィナーレの「ケルビーノ、勝利を、栄ある軍人として！」とトロイの戦士さながらに、大声で歌い始めたとき、舞台の歌手たちも、オーケストラの楽員たちも電撃的なショックを受け、恍惚のあまり「ブラヴォー！ ブラヴォー！ マエストロ！ 万歳、モーツァルト万歳！」と叫びました。楽員たちは、いつまでも喝采をやめようとはせず、譜面台で弓を叩いていたようでした。その小柄な青年は、自分に示された異常な熱狂ぶりに応えて、何度もおじぎをしながら感謝の気持ちを表していました。

『コジ・ファン・トゥッテ』は、1790年1月26日の初日のあと、1月28日、30日、2月7日、11日に舞台にかけられたが、それで打ち切りになってしまう。上演が不評だったわけではない。2月20日に皇帝ヨーゼフ二世が48歳で崩御したからだ。国民は喪に服して一切の公演を中止した。初演から3週間後の2月20日、『ヴィーン新聞』にコールマルクトのアルターリア社から新刊楽譜の広告が掲載された。第2幕第23曲ドラベツァとグリエルモによって歌われる二重唱「心をあなたにお贈りします、ぼくのいとしい人よ。」クラヴィア伴奏版で20クロイツァー（1300円）であった。その後、モーツァルトは、妻コンスタンツェがいるバーデンに2週間ほど滞在し、ヴィーンに戻ってきている。6月12日ごろにプフベルクに宛てたお金を無心する手紙に、「小生のオペラを指揮するために当地に戻っています。」と伝えている。『コジ・ファン・トゥッテ』の公演は、6月6日に再開されたのであった。その後8月までに5回上演された。『コジ・ファン・トゥッテ』について、モーツァルトが伝える情報は極めて少ない。そのため、このオペラが成立した経緯がよくわかっていない。1808年、プラハ・クラインザイト・ギムナージウム教授フランツ・ニーメチェクが著した『オリジナル資料に基づくヴォルフガング・ゴットリーブ・モーツァルトの生涯』には、次のように権力者から相当な圧力があつたことが記されている。

1789年12月、彼はイタリア語の喜劇的ジグシュピール『コシ・ファン・トゥッテ、またの名を、恋人たちの手ほどき』を作曲した。人々はあの偉大な精神の持ち主が身をおとし、あのようにお粗末な駄作テキストに天国的な甘美な旋律をちりばめたことに、一様に驚いている。モーツァルトは作曲依頼を拒否することはできなかったが、テキストは完全に彼に委ねられていた。

モーツァルトの死後、コンスタンツェが再婚した相手、ヴィーンのデンマーク大使館書記官だったゲオルク・ニコラウス・ニッセンが1823年にザルツブルクで執筆を着手したモーツァルトの伝記（未完）にも同様のことが記載されている。1836年6月、演劇出版者フリードリヒ・ハインゼがカール・ヘルロースゾーンに宛てた手紙が残っている。

フォン・ニッセンがそのモーツァルト伝であまりはっきりと述べていない事実なのですが、モーツァルトはヨーゼフ2世からじかにこの台本の作曲を依頼されたのです。一説によりますと、当時ウィーンでふたりの士官とその恋人たちとの間で実際に起こった、この台本の筋に似た市井の出来事が皇帝の関心を引き、宮廷詩人グエマラに命じて、このゴシップから「音楽による愉快的な劇」を作る光栄を与えることになったのだといいます。

ガストン・ドゥ・サン＝フォアは、『コジ・ファン・トゥッテ』と酷似したストーリーの喜劇を発見した。フランス人のニコラ＝トマ・バルトが1768年に書いた『いつわりの不貞』と題する喜劇である。『いつわりの不貞』では、二人の男性が衣装をとりかえて変装し、互いに相手の許嫁を誘惑する。『コジ・ファン・トゥッテ』の結末とは異なり、「いつわりの」二人組は結ばれたままで終わる。裏で糸を引く黒幕、ドン・アルフォンソ役も現れる。重要なことは、この喜劇の一つの役をヨーゼフ2世の妹、マリー・アントワネットがトリアノンで演じたことである。ヨーゼフ2世がこれを知り、側近に語った可能性は十分に考えられ、それが、ダ・ポンテに伝わったのかもしれない。しかし、皇帝が命令したという証拠は何一つ残っていない。ダ・ポンテは、ヴィーンでの活動を後押ししてくれたアントーニョ・サリエーリのために『恋人たちの学校』の台本を書いた。彼とは、それまで『一日成金』、『オルムス王アクスール』、『護符』、『忠実な羊飼ひ』、

『花文字』で協働してきた。しかし、当時、多忙を極めていたサリエリが第1幕第1場の最初の「私のドラベツラ」と「女たちの貞淑など」の三重唱の2曲とレチタティーヴォに手を付けただけで作曲をやめてしまったので、この台本はモーツァルトに回されることになったのだ。彼は、オペラのタイトルを『恋人たちの学校』から『ゴジ・ファン・トゥッテ』（女はみんなこのようにする）に変えてしまった。

ダ・ポンテは6名の人物を登場させている。フィオルディリージ Fiordiligi は、fior（花） di（の） ligio（忠実）で、忠実の花という意味、ドラベツラは、di ora（金メッキする） bella（美しい）で美しい金メッキという意味で名付けられている。アルバニア人に変装した二人の青年士官から言い寄られても、なかなか陥落しない忠実の花と、すぐにはがれてしまう金メッキで姉妹の性格を表している。フェランド Ferrando は、ferro（鉄）からきており、グリエルモ Guglielmo は、guglia（尖った）である。前者がそれほど感情をあらわにすることがないのに対して、後者は激しい怒りをぶちまけている。裏切ったフィオルディリージのことをFior di diavolo（悪魔の花）と罵り、美しいカノンでは陶醉している3人に対して、ひとり悪態をつく。ちなみに、ダ・ポンテの台本では、Guilelmoと表記されており、モーツァルトもGuillelmoあるいはGuilelmoと楽譜に記している。いずれもイタリア語の正字法ではGuglielmoになる。デスピーナ Despina は、de（～を抜かれた） spina（棘）という意味になる。とげとげしいところなくなったのなら、もっとふさわしい名前にすべきだが、棘には性欲という意味があるらしく、「1000人もの男を騙し手玉に取った」のでそんな名前になったのであろうか。ドン・アルフォンソ Don Alfonso は、姉妹の出身地フェッラーラの領主の名前からとられている。

モーツァルトは、ダ・ポンテの台本にこれまでも増して意欲的な音楽をつけた。八長調を基本にシャープが4つのホ長調、フラットが4つのヘ短調、変イ長調まで広がりを見せる。トランペットとホルンが独立して用いられ、アリアの伴奏ではトランペットがティンパニを伴わないで木管楽器の一員としてアンサンブルに参加する。こういった工夫が、これまでにない色彩を作り出すことに成功した。オーケストラの楽譜には、モーツァルトにしては大変珍しく細かな指示がたくさん書きこまれている。フェルマータは、『フィガロの結婚』の45回、『ドン・ジョヴァンニ』の35回に比べて、150回とかなり多い。愛情に満ち溢れる官能的な音楽と恐怖のシーンにおける激しい音楽。様々な効果音。特に、デスピーナが医者に扮してヒ素中毒を解毒するシーンは興味深い。デスピーナは言う。「これが磁石というものじゃ、メスメル博士の！」そして、磁石で病人の頭を触り、彼らの体をそと上から下へなでる。

メスメル博士は実在の人物（フランツ・アントン・メスマー）で、モーツァルト家とは親しい間柄であった。1734年にスワビア公国イツナックで生まれたメスマーは、敬虔なカトリック教徒であった。彼は、聖職者になるために、1750年、修道院付属学校からバヴァリアのディリゲンゲン大学に進学し4年間哲学を学んだあと、インゴールシュタット大学の神学科に進んだ。しかし、聖職につかず、法律学を学ぶために、1759年にヴィーン大学に入学したが、それも1年で断念し、1760年にヴィーン大学医学部に再入学した。1766年に『人体における天体の影響』という題目で「宇宙流体が人体に影響を与えることが原因で、病気を引き起こす」という内容の博士論文を提出している。医師として活動を開始したメスマーは、1768年1月10日に裕福な貴族の家柄であったマリア・アンナ・フォン・ポッシュ未亡人と結婚した。彼は、仕事以外のほとんどの時間をチェロやクラヴィコード、グラスハーモニカの演奏に費やしたという。そして、1768年のある日、ヴィーンを訪れていたモーツァルト一家と知り合うことになる。当時モーツァルトは12歳。彼が作曲した大作のオペラ『偽りのろま娘』KV 51を上演すべく、リハーサルが始まっていたが、ヴィーンのオペラ界を牛耳っていた興業主ジュゼッペ・アブリジオの陰謀で公演中止に追い込まれてしまう。そこで、メスマーが1幕物の『バステアンとバステイエンヌ』KV 50の作曲を依頼し、自宅で上演することにしたとされている。ただし、この逸話の真偽のほどは不明である。

メスマー夫妻は1770年代、フランツィスカ・エステルリンクという20代後半の女性（バーデンのさる大尉の娘でおそらく夫人の従姉妹）と同居していた。フランツル（フランツィスカのオーストリア語の愛称）は、魅力的でかわいらしい女性であったが、心身症の一種に苦しんでいた。メスマーの臨床記録には「ヒステリー熱が原因となって次のような症状が発生する。痙攣、嘔吐発作、腸炎、排尿困難、歯と耳の疼痛、病的幻覚、硬直、卒倒、一時的な盲目、窒息感、麻痺の発作（これは何日も続く）、その他重篤な症状」と記載されている。これを根治するためにあらゆる最先端の医療技術、すなわち、電気ショックや薬物療法、瀉血や下剤、発泡剤軟膏を試したが効果がなかった。しかし、克明に記録をつけていたメスマーはまるで潮の干満のような周期的な発作が襲っていることに気が付いた。レーオポルト・モーツァルトが17歳のヴォルフガングを連れて再びヴィーンを訪れた1773年、メスマーと再会した。レーオポルトはザルツブルクの妻に宛てて、フランツルの様子を書き送っている。

7月21日 フランツル嬢には寝台に寝ているところをお目にかかりました。彼女は実際かなり痩せ衰えていて、もうひとつでも同じような病気をすれば死んでしまうでしょう！

8月12日 フランツ嬢はそうこうしているうちにまた死にかかりました。それで彼女の手足に発泡剤を塗りました。今日またかなりよくなったので、彼女はヴォルフガングのためにベッドで赤い絹製の財布を編んで作ってくれ、記念にとくれました。

8月21日 フランツ嬢はまた病気が再発しましたが、今度もまた回復しました。彼女が瀉血をたくさんしたり、薬をたくさん飲んだり、発泡薬を飲んででも大丈夫で、しかもひきつけにも失神にも耐えているのは驚きです。だって彼女は骨と皮ばかりだからです。でも、どうなるかはおまえも知ってのとおりです。こうした人たちはまったく持ちこたえられません。

8月25日 フランツ嬢はまたよくなりました。リーゼル嬢は、フランツ嬢がさる将校と結婚したと私に話してくれました。

メスマーは、フランツに磁気治療を行うことにした。磁石の持つ引力と斥力によって宇宙流体の干渉を制御し、人体が持つ動物磁気のバランスを整えることで、精神的な病気を治せる、と考えたからである。メスマーは1779年に発表した『動物磁気発見についての回想』でその時の様子を記している。『ゴジ・ファン・トゥッテ』の解毒のシーンと同じである。長いトリルは「電流のような流れ」が体内を走り回っている様子を表している。

この患者の発作が再発したのは1774年7月28日のことである。そのとき私は磁石を、胃の上にひとつ、両足にひとつずつ、合計三つ置いてみた。すると患者は直ちに激しい症状を示し始めた。患者は電流のような流れが体内を走り回るのを感じ、痛みを伴うこの流れは行き先を探して体内のあちこちをさまよい、最後に手足の方へ流れて落ちて行った。このあと発作は緩解しその状態は6時間続いた。翌日再び発作が起きたため私はこの実験をくり返し、前日と同じ成功を収めた。

メスマーは磁気で宇宙流体を操作し、動物磁気の伝達を証明できたと考えたが、誰も信じなかった。しかし、今日では、メスマーは宇宙流体を操作したのではなく、暗示の力を用いる方法を習得していたのであり、患者を起きている状態から催眠状態（トランス状態）に誘導する方法（睡眠療法）を発見したと考えられている。ユングやフロイトよりも100年も前に、である。しかし、科学的根拠に乏しいという理由で、効果があった患者からは熱狂的に支持された一方で、魔術師、詐欺師というレッテルを貼られてしまった。いまでは、催眠術の創始者として彼の名前からとられたメスマリズム、メスマイズ、メスマリク、メスマリストという言葉が残っている。

1780年3月16日、24歳になったモーツァルトは、ザルツブルク大司教ヒエローニムス・コロレードの命を受け、ヴィーンに到着した。翌日、ザルツブルクに住む父に宛てて、到着の報告をしている。

——いまこの手紙を書いているのは——どこでしょう？——ラントシュトラーセのメスマー邸の庭園です。——ここの老婦人は家にいませんが——もとのフランツ嬢はいまではフォン・ポッシュ夫人となっています。——彼女はあなたとお姉さんに、なんども繰り返してくれぐれもよろしく伝えてほしいと言っています。——ところが聞いてください、ぼくの名誉にかけて言いますが、ほとんど彼女は見極めがつかみませんでした。——それほど彼女は太り、肥満しています。——彼女には3人の子供がいて——2人の令嬢と1人の若様です。——その上のお嬢さんはナンネルといって4歳ですが、6歳といわれても疑わないでしょう。——若様の方は3歳ですが、もう7歳には見えます。——そして、9か月の赤ちゃんは、2歳で通るでしょう。——それほどみんな元気で、たくましく成長しています。

骨と皮ばかりだったフランツ嬢は、磁気治療のおかげですっかり完治し、1776年にメスマーの義理の息子フランツ・デ・パウラ・フォン・ポッシュと結婚していた。モーツァルトは、『ゴジ・ファン・トゥッテ』のなかで、詐欺師のメスマーを皮肉り茶化して登場させているという解説を目にするが、この手紙からもわかるように、フランツ嬢の回復ぶりから磁気治療法を信じ、彼を偉大な医師と尊敬していたのではないか。最大の見せ場で彼を登場させたのは、モーツァルトのアイデアとしか思えない。

メスマーは、1777年、盲目の女性ピアニスト、マリア・テレジア・フォン・パラディースの治療にもあたった。彼女の父は女帝マリア・テレジアに仕える秘書で、マリア・テレジアという名は女帝に授けられた名前であった。彼女は3歳で突然失明してから、両親はヴィーンで最高の医療（瀉血、下剤投与、発泡軟膏の塗布、石膏で頭部を締めつける療法、3000回以上の両目への電気ショック）を受けさせたが、その視力は回復しなかった。最後の望みをメスマーに託したのであった。メスマーは、マリア・テレジアの疾患を「両目の痙攣を伴う完全な黒内障である、その結果、彼女は深いうつ状態および脾臓と肝臓の障害に苦しんでいる、その苦痛が原因となって、彼女は発狂するのではないかという恐怖を抱くほど重篤な意識混濁を起こすことがある。」と診断してい

る。両目そのものより神経に問題があると考えた。何故なら、両親も娘と同様の神経症を患っており、突発的に理性を失って憤激することがあったからだ。メスマーは娘が盲目になった原因は両親にあると感じた。そこで、動物磁気療法を始めた。彼女の父によると治療2日目にはひどく驚かせる効果が認められた。メスマー博士が手にした杖を動かすと、それに従うようにマリーア・テレジアは頭を動かしたのである。その後視力は順調に回復したが、それがゆえに、神経質になった彼女はミスタッチを犯すようになり、ピアノの演奏に支障が生じてしまった。治療開始当初は大喜びだった両親は、娘の将来が不安になり、また、メスマーの治療法を良く思っていなかったヴィーン大学の眼科医、ヨーゼフ・バルト教授の陰謀もあり、治療をやめさせてしまった。

メスマーはこのごたごたでヴィーンを去る決心をし、フォン・カウニッツ首相の推薦状を持って1778年2月、パリに向かった。そこで彼は、『動物磁気発見についての回想』を著し、動物磁気の原理で神経系の疾患を直接治せるという持論を展開した。彼の診療所にはおびただしい患者が集まり、治療で症状が治まった患者は多く、マリー・アントワネットの親友ドゥ・ランバール公爵夫人をはじめ信奉者も増えた。一方で、国王ルイ16世は、王立委員会に動物磁気の実在とその有用性について調査を命じた。委員の中にはベンジャミン・フランクリン（アメリカ建国の父、避雷針やグラスハーモニカの発明者）ジャン・シルヴァン・バイイ（天文学者でフランス革命後のパリ市長）、アントワヌ・ローラン・ラボウズィエ（質量保存の法則の発見、ギロチンで処刑された）、ジョーゼフ・イグナス・ギヨタン（医師、無痛で処刑できるギロチンの発明）らがいた。その結果、1784年8月11日、動物磁気の実在は否定され想像力によって治療効果が出ているとの結論がでた。パリ大学医学部は動物磁気の実用を禁止した。モーツァルトは『ゴジ・ファン・トゥッテ』のなかで、デスピーナに「これが磁石というものじゃ、メスメル博士の！ドイツでできて、有名になったのはフランスで。」と歌わせているが、フランスでも追われる立場になってしまったのである。さて、盲目に戻ってしまったパラディース嬢はどうなったのかというと、母とともに1784年8月27日、ザルツブルクに里帰りしていたモーツァルト夫妻を訪ねている。モーツァルトのことは、メスマーから聞いていたのであろう。モーツァルトは、彼女が秋にパリで演奏するためにクラヴィア協奏曲第18番変ロ長調KV 456を作曲した。この曲は1785年2月13日に行われた演奏会でモーツァルト自身も弾いており、あまりの美しさに演奏を聴いたヨーゼフ2世は、モーツァルト退場の際、「ブラヴォー、モーツァルト」と叫んだという話が父レーオポルトから娘に宛てた手紙に記されている。

『ゴジ・ファン・トゥッテ』でアルバニア人に扮したグリエルモとフェランドがヒ素を服用して自殺を図るシーンがある。ヒ素は元素記号As、原子番号33の元素で、古代ローマ時代から殺鼠剤として使われてきた。毒性が高いのは亜ヒ酸（As(OH₃））で、鶏冠石（四硫化四ヒ素As₄S₄）や黄色の雄黄（三硫化二ヒ素As₂S₃）、硫ヒ鉄鉱（FeAsS）などを水で加熱するだけで得ることができる。温泉水や鉱山廃水による地下水のヒ素汚染は、これまでも大きな社会問題になってきた。16世紀には亜ヒ酸がイタリアでアクア・トファナ（トファナ水）という美白効果がある化粧水として上流階級の夫人に珍重された。ヒ素は細胞内に取り込まれるとチオールと結合して、ミトコンドリアのピルビン酸デヒドロゲナーゼなどを阻害することにより強力な細胞障害性を示す。美白効果は、メラニンを産生するメラノサイトを障害することにより得られるが、現代でも、急性前骨髄球性白血病の治療薬としても使われている。

亜ヒ酸の服用により、胃腸障害や呼吸中枢抑制、精神神経学的症状を呈するが、デスピーナはこれを磁石の力で治す。メスマーの『動物磁気発見についての回想』によると、発作の間には患者に鉄剤をずっと投与していたとある。ヒ素は鉄と結合することはずいぶん古くから知られており、現在でも、ヒ素に汚染された土壌を浄化するために、ヒ素を鉄粉と磁石で除去する方法が使われている。むしろ、人体への応用は難しいと思われるが、ダ・ポンテやモーツァルトはそのことを知っていたのであろうか。磁気による治療は、現代でも行われている。1985年にアンソニー・バーカーが発表した経頭蓋磁気刺激（Transcranial Magnetic Stimulation, TMS）は、非侵襲的に中枢神経を刺激する方法で、電磁誘導の法則（ファラデーの法則）を原理としている。変動磁場を用いて脳皮質に渦電流を誘導し、神経細胞を直接刺激する方法で、うつ病の治療では、左背外側前頭野に高頻度刺激を行って神経活動を活性化し、右背外側前頭野に低頻度刺激を行って神経活動を抑制する。2017年9月に既存の抗うつ薬による十分な効果が得られない成人のうつ病患者を対象とした経頭蓋治療用磁気刺激装置（rTMS）が薬事承認され、2018年3月、日本精神神経学会が適正使用指針を策定した。そして、2019年6月、保険収載される予定である。

前述したように他のオペラと異なり、モーツァルト自身が伝える『ゴジ・ファン・トゥッテ』の情報は極めて少ない。ダ・ポンテが1830年、移住先のニューヨークで著した『回想録』に『ゴジ・ファン・トゥッテ』のことが述べられている。しかし、驚くべきことにたったこれだけである。

『恋人たちの学校』にはモーツァルトが音楽をつけた。このドラマは、とても有名になったあの音楽の父から生まれた3人の娘のうち3番目にあたった。

言うまでもなく、2人の姉は、『フィガロの結婚』と『ドン・ジョヴァンニ』である。この頃のダ・ポンテの関心ごとは、『コジ・ファン・トゥッテ』ではなく、オペラ存続の危機にあったのだ。オーストリアを取り巻く環境は厳しくなりつつあった。ロシアの同盟国であるオスマン帝国との戦争が長期化し、戦局は有利ではあったが、戦費がかさみ緊縮財政を強いられていた。そのうえ、オーストリア領ネーデルランドやハンガリーでは反乱が起り、そこに加えて1789年、フランス革命が勃発していた。これまでオペラを手厚く庇護してきた皇帝ヨーゼフ2世がイタリア・オペラ団への保護を打ち切る通告を出す事態になっていたのである。ダ・ポンテは、イタリア人オペラ関係者のために、パステイチョ『音楽の蜜蜂』の上演に腐心し、予約を募って資金を集める提案が皇帝に受け入れられた。イタリア人のオペラ関係者の首はつながったのである。パステイチョとは、有名な作曲家のアリアなどをつぎはぎしたオペラのコラージュである。しかし、ヨーゼフ2世の後を継いだ弟レーオポルト2世はオペラ政策を一変し、1791年1月25日、宮廷詩人ダ・ポンテを解任してしまう。1791年にナポリ王国の王がヴィーンを訪れた際、ヴィーンに駐在していたナポリ大使が国王のためにカンタータを捧げることになり、音楽をピティッキオに、作詞をセラフィーニに依頼したが、期日に間に合わなくなったので、ダ・ポンテが代役を引き受けることになった。期日に間に合わせたダ・ポンテは、ナポリ大使に大いに感謝され金一封と金時計が贈られたが、彼は、フィオルディレージを歌った「愛人」フェツラレージに金時計を渡してしまったのである。この非礼な行為にレーオポルト2世は激怒し、ダ・ポンテとフェツラレージをオーストリアから強制退去させることにした。『コジ・ファン・トゥッテ』の台本が不道徳であるという批判から始まった転落に、後年、彼が多くを語りたくなかったのではないかの推測もなされている。

『コジ・ファン・トゥッテ』が初演された1790年1月26日、ヨハン・カール・ツインツェンドルフ伯爵の日記がその様子を伝えている。

6時前に新しいオペラ『コシ・ファン・トゥッテ又は恋人学校』。モーツァルトの音楽は魅力的だし、素材も非常に面白い。

1791年5月1日に『コシ・ファン・トゥッテ』のドイツ語による初演がフランクフルトで『恋とたくらみ』と題して行われた。その際、翻訳を担当したのは、カール・ダーフィット・シュテークマンとフリードリヒ・ルートヴィヒ・シュレーダーである。シュレーダーは4月28日の日記にこのように評している。

モーツァルト作曲によるジグシュピール『女はみんなこうしたもの』は、すべての女性を侮蔑しており、女性の観客には決して気に入られず、したがって成功しないというみじめな作品だ。

その後、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、1825年5月に「このようなオペラは私には作曲できないでしょう。こうしたものには嫌悪感を感じるのです。——このような題材を私が選ぶことなどありえません。私には軽薄すぎます。」といい、リヒャルト・ワーグナーは、1851年に「私は、『コシ・ファン・トゥッテ』に『フィガロ』のような音楽を案出することができなかったモーツァルトにどんなに心から愛し、崇拝していることだろう。」と述べている。モーツァルトの死後、台本が勝手に改作・省略され、別のタイトルで上演されることが多くなった。このオペラが再評価されたのは、リヒャルト・シュトラウスによってである。1910年12月、シュトラウスが指揮をしたミュンヘン・レジデンツ劇場でのオペラの試演の際に論文が発表されている。

モーツァルト最後の偉大なオペラ・ブッフ『コシ・ファン・トゥッテ』はさまざまな運命を体験し、この巨匠の劇作品の中でも、演出家や観客から、今日にいたるまで実際いつも継子の扱いを受けてきた。『コシ・ファン・トゥッテ』に関する一般的な平均的見解というところ、概して、このオペラは、一連のとびぬけて美しい歌、たとえば有名な別れの五重唱とか、第1幕のフィナーレとか、デスピーナの非常に愛好されているふたつのアリアだとかいったものを含んではいても、全体としてはモーツァルトのあまり出来のよくない部類の作品だ、というものである。それどころか、リヒャルト・ワーグナーは、粗悪な台本がついているせいで、モーツァルトは特に第2幕では、他の場所ではあんなにしなやかな動きをしているのにここではいくらだれさせてしまっている、とさえ評しているのである。話の筋はそれ自体としては特に機知に富んでいるわけではないという点でリヒャルト・ワーグナーの見解に同意するとしても、私としては、ストーリーの多少不可能と思える前提を度外視すれば、台本の心理的展開には、特に当時の時代状況を考慮すると、何らかの関心を認められないこともないという点に注意を喚起したい。

スタンダードは、『コジ・ファン・トゥッテ』を評した際、こう述べている。「モーツァルトが数多くの芸術家の中でもあれほど特異な存在であるのは、恐ろしさと優しい官能的悦びとの二つの性質が結びついているが故である。たとえば、ミケランジェロは恐ろしいのみであり、コレッジョは優しいばかりである。」

引用の際、原文をそのまま抜粋して引用したため、用語に統一感がないことをお断りしておきます。

2019年6月11日 武本 浩

【参考文献】

1. Faye Ferguson, Wolfgang Rehm: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5, Band 18: Così fan tutte ossia la scuola degli amanti, Bärenreiter Verlag (1990, 2010, 2012).
2. 高橋英郎訳詞：モーツァルト劇場版 モーツァルト〈五大オペラ〉日本語・新訳詞集（1996）。
3. アッティラ・チャンパ，ディートマル・ホラント編，永竹由幸，田中純訳：モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ，音楽之友社（1988）。
4. 小瀬村幸子訳：モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ，音楽之友社（2002）。
5. アッティラ・チャンパ，ディートマル・ホラント編，戸口幸策，竹内ふみ子，藤本一子訳：モーツァルト フィガロの結婚，音楽之友社（1987）。
6. 高橋英郎：モーツァルト，講談社（1983）。
7. クリストフ・ヴォルフ著，磯山雅訳：モーツァルト 最後の四年 栄光への門出，春秋社（2015）。
8. 高野紀子訳・解説：最初期のモーツァルト伝，モーツァルト叢書18，音楽之友社（1992）。
9. 西川尚生：モーツァルト，音楽之友社（2005）。
10. 高橋英郎：モーツァルトの手紙，小学館（2007）。
11. 海老沢敏，高橋英郎：モーツァルト書簡全集II，白水社（1980）。
12. 海老沢敏，高橋英郎：モーツァルト書簡全集IV，白水社（1990）。
13. 海老沢敏，高橋英郎：モーツァルト書簡全集V，白水社（1995）。
14. 海老沢敏，高橋英郎：モーツァルト書簡全集VI，白水社（2005）。
15. オットー・エーヒ・ドイッチュ，ヨーゼフ・ハインツ・アイブル編，井本响二訳，ドキュメンタリー モーツァルトの生涯，シンフォニア（1989）。
16. ルードルフ・アンガーミュラー著，吉田泰輔訳：モーツァルトのオペラ，音楽之友社（1991）。
17. 田之倉稔：モーツァルトの台本作者 ロレンツォ・ダ・ポンテの生涯，平凡社（2010）。
18. 絹川文仁：イタリアオペラのスコアリーディングの一指針～モーツァルト作曲・ダポンテ台本「コジファントゥッテ」第1幕台本に隠された官能的表現を探る～，千葉経済大学短期大学部研究紀要，9，83-90（2013）。
19. フリッツ・ノスケ著，細川周平訳：MOZARTオペラの解説，冬樹社（1985）。
20. ヴィンセント・ブラネリ著，井村宏次，中村薫子訳：ウィーンから来た魔術師 精神医学の先駆者メスマーの生涯，春秋社（1992）。
21. 宮下振一，貝瀬利一：ヒ素と医薬品，日本新薬株式会社，1-11（2008）。
22. A. T. Barker, R. Jalinous, I. L. Freeston: Non-invasive Magnetic Stimulation of Human Motor Cortex, Lancet, 325 (8437), 1106-1107 (1985).
23. 反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）適正使用指針，日本精神神経学会（2008）。
24. スタンダード著，高橋英郎・富永明夫共訳：モーツァルト，中央公論社（1957）。

次回予告

レーオポルト・モーツァルト生誕 300 周年 大阪モーツァルトアンサンブル 創立 35 周年 第 70 回定期演奏会

日時：2019 年 10 月 22 日（火・祝）午後 2 時開演

会場：豊中市立文化芸術センター 大ホール

曲目：レーオポルト・モーツァルト ミサ・ソレムニス 八長調 I:C2 他

独唱：服部響子（ソプラノ）、矢守渚奈子（アルト）、納多正明（テノール）、油井宏隆（バス）

指揮：武本浩 オルガン：松園洋二 合唱：亀岡混声合唱団 管弦楽：大阪モーツァルトアンサンブル

レーオポルト・モーツァルト生誕 300 周年 亀岡混声合唱団 創立 30 周年 第 30 回定期演奏会

日時：2019 年 11 月 17 日（日）午後 2 時開演

会場：ガレリアかめおか コンベンションホール

曲目：レーオポルト・モーツァルト ミサ・ソレムニス 八長調 I:C2 他

独唱：服部響子（ソプラノ）、矢守渚奈子（アルト）、納多正明（テノール）、油井宏隆（バス）

指揮：板倉計夫 オルガン：松園洋二 合唱：亀岡混声合唱団 管弦楽：大阪モーツァルトアンサンブル

石澤整形外科 (医師：石澤 命仁)

診療科：整形外科、外科、リハビリテーション科、リウマチ科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9時~12時)	○	○	○	○	○	○
午後 (5時~7時)	○	○	X	○	○	X

豊中市本町 7 - 2 - 16
TEL : (06) 6852-3371
FAX : (06) 6852-3362